

John Donne と「論争神学」

朝 倉 秀 之

序

宗教改革以降、英国国民の心には分裂が生じてくる。同じ問題、同じ事件であっても、どの宗教に属するかによって、その解釈は大いに異なることとなった。キリスト教という中でのことであれば、どの宗教というよりどの宗派の方が正しい使い方であるかもしれない。

ローマ・カトリックは英国とヨーロッパ全体の宗教的伝統を守ろうとし、ピューリタンはキリストの福音による改革を行おうとし、英国国教会は伝統を重んじながらカトリックとプロテスタントの中道を歩もうとしていた。

1572年カトリック教徒の家に生まれ、1631年英国国教会聖パウロ寺院の主教という現職で死んだ John Donne もその歴史的状況を避けて通ることはできなかった。というよりもそのような時代を正に生きた人物であった。

Donne は Shakespeare より8年あと、Ben Jonson とは同年の生まれであり、イギリス文学史上は17世紀形而上詩人の代表として分類される。

Donne については恋愛詩を中心にした研究が多いが、散文についてのものも着々と増えている。散文の中には『逆説と諸問題』、『自殺論』、『ニセ殉教者』、『イグナティウスの秘密会議』、『神学論集』、『祈禱集』、『書簡集』、『説教集』などがあるが、今回は主に「論争神学」との関連で考察することとする。

I

「論争神学」(Polemics) という学問が成立しはじめるのは、カトリックとプロテスタントが立場を明確にしようとする宗教改革以降である。プロテスタントの中でもルター、ツヴィングリ、カルヴァンによって主張が異っていたが、少なくともカトリックは攻防に備え「論争神学」を確立することにあつた。

カトリック神学校ではこの「論争神学」を開講し、論争に必要な論法を教えていた。プロテスタントが問題としていたのは、カトリック的伝統に属するものほとんどすべてに対してであった。例えばミサ、聖体拝領、マリアや聖人に対する尊崇、煉獄の観念それにローマ教皇の権威をはじめローマ教会の位階制度など。

英語に関して OED の polemic の項の用例は1638年が最初であり、dispute, controvert などの論争に関する語が頻繁に使われるのは1600年に入ってからである。

しかし論争そのものはそれ以前から活発であった。特に印刷技術の発達や出版物として多く現

われてくるのが OED の記録となっていると思われる。エリザベス朝時代の大論争はジョン・ジュエル (1571年歿) とトマス・ハーディング (1648年歿) との間に戦わされた。ジュエルは英国国教会の立場に立ってカトリックに伝統的な教義や慣習の根拠を示せと迫った。カトリック側はハーディングの他ニコラス・サンダーズ (1581年歿)、トマス・スティブルトン (1598年歿)、ウィリアム・アレン (1677年歿) がいた。カトリックの論客たちは皆英国外の亡命者であり、論争神学の中心地の 1 つルーヴァンに集結していた。英国内のカトリックの司祭たちは発言を許されていなかった。しかし新しい司祭の一団が国外から帰ってきて、国内のカトリックの決意を強固にしようと活動しはじめていた。

フランスのドウエイに新設された英国人のための神学校でウィリアム・アレンの薫陶を受けた神父たち、さらにロバート・ベラーミン (1621年歿) に教えを受けた英国人イエズス会士神父たちが帰国してくる。

ベラーミンはローマのグレゴリオ神学校で「論争神学」を1576年から1588年まで受け持っていた。その弟子たちがヘンリー・ガーネット (1606年歿)、ロバート・サウスウェル (1595年歿)、エドワード・オールドコン (1606年歿) である。

イエズス会士たちはカトリックの中でも、一般の司祭より教育的にも霊的な修練でも長期間の訓練を受けており、あらたに始まる論争でも主導的役割を果すことになる。論旨も明確で、なぜ英国人はカトリック信仰に忠実でなければならないのか。なぜ新しい国教会の礼拝に出席を拒否しなければならないのか。政治的な目的ではなく、純粹に霊的な理由によるものであることを強調した。

リチャード・ブリストウ (1711年歿) の『動機』(Motives) やイエズス会士ロバート・パースンズ (1610年歿) の『要論』(*A Brief Discourse*) などはカトリック教徒に大きな影響を与えた。パースンズと同じイエズス会士エドモンド・キャンピオン (1581年歿) が『枢密院諸卿への手紙』(*Letter to the Lords of the Council*) という小冊子で、なぜ国内に帰ってきたかを述べ、後にさらにラテン語の『理由十カ条』(*Rationes Decem*) の中でその理由を書いている。

キャンピオンの『手紙』に対してウィリアム・チャーク (1593年歿) とメレディス・ハマー (1604年歿) が反論し、それにキャンピオンの友パースンズが応酬した。チャークとハマーはふたたび攻撃を加え、イエズス会士全体に非難を向けて、パースンズやキャンピオンがプロテスタント体制を転覆させようとしていると論駁した。これに対してパースンズがまたしても『批判の弁護』(*A Defence of the Censure*) を書いて応える。またキャンピオンのラテン語の論文に対してケムブリッジのウィリアム・ウィタカー (1595年歿) とオックスフォードのローレンス・ハンフリー (1590年歿) という、実に両大学の欽定神学講座の教授が乗りだすこととなった。しかし、この論争は純粹に神学的にはなく、政治的な結末を迎えた。キャンピオンは危険人物として捕えられ、国教会への改宗を拒絶したため、国王への反逆罪に問われて処刑された。絞首刑の後で死体を引き回わされ、さらに八つ裂きにするという惨酷な刑であった。1581年パースンズは身の危険を感じ国外へ逃亡した。

時の国務大臣ウィリアム・セシルは政治的混乱をさけようと1583年『英国に於ける正義の執行』(*The Execution of Justice in England*)を出版したが、ウィリアム・アレンが翌年『英国カトリック教徒弁護論』(*Defence of English Catholics*)を書いて反論した。彼らがあえて殉教をいとわないのは政治のためでなく信仰のためだと論じた。

このように「論争神学」が単に神学者間の学問的な論争ではなく、個々人の魂の救済にとってかけがえのない切実な重要性を持っていたのである。 キャンピオンが惨酷な処刑を受けた年(1581年) Donne は9歳であった。その光景を実際に見たかどうかわからないが、大きなショックを受けたことは確かなことである。後に聖職についてから説教でキャンピオンを1回引用している。 Donne が後になっても気になったことの1つはキャンピオンが英国国教会の執事助手を受けた後に、ローマ・カトリックに改宗し、イエズス会士にもなったということがあるかもしれない。 Donne はパーソンズについて『ニセ殉教者』の中で偉大な指導者であり、人格者であったということを書いている。

それではどのようにして Donne が論争神学という学問に触れていったのかを見てみたい。1つにはイエズス会士であり、当時の枢機卿でもあったベラーミンの影響力である。

II

Donne とベラーミンが直接会ったかどうかはわからないが、Donne が英国国教会の立場で書いた論争パンフレットによってベラーミンも Donne の言動に注目したであろう。 Donne が聖職者として聖パウロ寺院にいるときには、論駁すべき論敵と考えたかもしれない。

ベラーミンは『現代信仰論争集』(*Disputationes de controversiis Christianae Fidei*)の第1巻を1586年、第2巻を1588年、第3巻を1593年に書き、それぞれに出版している。

Donne とベラーミンについてウォルトンは次のように述べている。

Being to undertake this search, he beleaved the learned Cardinal *Bellarmino* to be the best defender of the Roman cause: and therefore undertook the examination of his reasons. The cause was waighty, and wilfull delaies had been inexcusable towards God and his own conscience; he therefore proceeded with all moderate haste; And before he entered into the twentieth yeare of his age, did shew the Deane of Gloucester all the Cardinalls Works marked with many waighty Observations under his own hand, which Works were bequeathed by him at his death as a Legacy to a most deare friend.¹

(大意：神学を研究するにあたり、彼(ダン)は学者の枢機卿ベラーミンをローマ・カトリック教会の最大の論客だと信じていた。それ故に自分の根拠を詳細に検討したのである。その理由は重大で、決心するのが遅れたのは、神様と自分の良心との両方に言い訳がたたなかったから

1. Garrod, H. W., *John Donne Poetry & Prose with Izzac Walton's Life*, Oxford, 1960, xx

である。ダンはその故にあまりいそがずにいた。そして二十歳にならないうちに、自分の手でたくさん重要な注をほどこしたベラーミン枢卿の著作をグロスターの主教（彼の名を忘れてしまったが）に見せたのである。それを最も親しい友人にダンが形見として遺贈している。）

前に述べたベラーミンの直弟子であったイエズス会士ガーネット、サウスウェル、オールドコーンのうちの誰かが Donne にベラーミンの博学ぶりを教えたのであろうというのがボールドの推測である。² Donne がベラーミンを研究しはじめるのが1591年で19歳の時ということになる。

Donne はベラーミンの注解書を作るほどに熱心に研究した。当時の論争神学を集大成したものを研究することで適確に現代キリスト教の問題点や論争となっているところを把握していった。

Donne が19歳でベラーミンを研究し始めた時、反論するなどということより尊敬すべき神学教授として考えていたであろう。そして「論争神学」の方法論や論理の展開などを純粹に学んでいった。

後に聖職についてから、説教の中でベラーミンを29項目にわたって49回引用していることからみても Donne がよくベラーミンを読んでいたことがわかる。聖アウグスティヌスや聖トマス等、伝統的教父たちの引用は確かに多いが、同時代の神学者としてはベラーミンの引用が一番多いのである。

しかし引用が多いことが、すぐにベラーミンを肯定することではない。Donne が反論すべきところは、明確に述べている。例えば、ベラーミンが殉教者礼賛をしていることに対する Donne の反論など。Donne はベラーミンから学んだ「論争神学」というものをどのような形で作品の中に表わしているであろうか。

III

Donne は『諷刺詩』(*The Satyres*) という形式を使って5篇（あるいは7篇）を1593年から1598年にかけて書いた。これらは『恋愛詩』(*Songs and Sonnets*) 中の詩のように原稿のまま友人たちに回覧されていた。1599年6月4日にカンタベリーの主教ジョン・ウィットギフトが諷刺文学禁止令を出したのは、英国国教会に対する諷刺詩や諷刺劇が多数出まわり、当時有名になった「マーティン・マープレット論争」なるものが出て国教会の聖職者たちの私生活を容赦なく書きたてたことも大きく影響したであろう。このマーティン・マープレットなる謎の人物は、1588年から9年間にわたってパンフレットを出しつづけたが、結局誰かわからないままに終わった。

英国国教会はともかく批判めいた言動を押えるためにも禁書をリストにして、公的な場で焚書にした。³

Donne が国教会のブラック・リストに乗ることはなかったと思うが非常に微妙な立場にいた。

2 Bald, R. C., *John Donne- A Life*, Oxford, 1970, p69

3 Harrison, G. B., *A Last Elizabethan Journal*, vol.3, pp20-21

その6年前に弟の Henry がカトリック司祭を匿った罪で捕えられ、獄死していた。Donne の諷刺詩の中に

But when he sells or changes land, he impaires
His writings, and (unwatch'd) leaves out, *ses heires*,
As sily'as any Commentater goes by
Hard words, or sense; or in Divinity
As controverters, in vouch'd Texts, leave out
Shrewd words, which might against them clear the doubt.

(Satyre II, 11. 97-102)

(大意：しかし彼は土地を売ったり、転売するときには、自分の証書を破棄したり、(誰も見ていないと) 相続人を除外したりする。まるで聖書注解者が手に負えない語句や意味をとばしたりするように愚かしい。また神学で御墨付の聖句を用いる論争神学者どもは都合の悪い語句を除外する。その語句が彼らの信仰上の疑いを晴らすかもしれないのに。)

詩人であり法律家のコスカス (he) への皮肉を込めている箇所である。Donne 自身も詩人であり法律を勉強していることから、法律を乱用して金もうけをしようとしている者を諷刺しようとしている。

この詩の中で面白いのはそのような人物を諷刺するのに使われている語句である。神学も研究し、自らもベラーミンの注解書を作成するほどであるにもかかわらず、ここでは聖書注解者たちの無能ぶりや論争神学者と呼ばれる人たちの馬鹿さかげんを述べている。しかし逆に Donne は自分自身が苦しんでいるからこそこのような諷刺の形として表わすことができたのかもしれない。

この詩で用いている controverter は Donne の造語であるが、OED には Ben Jonson の例文も載せてある。

Some controverters in dignity are like swaggerers in a tavern, that...turn everything into a weapon.

いばりくさった論争神学者どもは酔っぱらいみたいに酒場において、あらゆるものを武器にしてしまいやがる。(Discov., Controv. scriptores, 1636)

共に controverter の意味するところはかんばしくない使われ方である。Donne の宗教観を知るうえでよく引用される諷刺詩がある。

Seeke true religion. O where? Mirreus
Thinking her unhous'd here, and fled from us,

Seekes her at Rome; there, because hee doth know
 That shee was there a thousand yeares agoe,
 He loves her ragges so, as, wee here obey
 The statecloth where the Prince sate yesterday.
 Crants to such brave Loves will not be intrall'd
 But loves her onely, who'at Geneva's cell'd
 Religion, plaine, simple, sullen, yong,
 Contemptuous, yet unhansome; As among
 Lecherous humors, thers is one that judges
 No wenches wholsone, but course country drudges.
 Graius stayes still at home here, and because
 Some Preachers, vile ambitious bauds, and lawes
 Still new like fashions, bid him thinke that shee
 Which dwels with us, is onely perfect, hee
 Imbraceth her, whom his Godfathers will
 Tender to him, being tender, as Wards
 Take such wives as their Guardians offer, or
 Pay valewes. Carelesse Phrygius doth abhorre
 All, because all cannot be good, as one
 Knowing some women whores dares marry none.
 Graccus loves all as one, and thinkes that so
 As women do in divers countries goe
 In divers habits, yet are still one kinde,
 So doth, so is Religion;

(Satyre III, 11. 43-68)

(大意：真の宗教を探し求めよ。え、どこにだって？ ミレアスはこの英国から逃げ去ったと考
 えてローマに彼女（宗教）を求める。ローマには千年前は確かにいたのだからと彼女のポロ服
 を愛している。ちょうどきのう国王が坐った敷物だといってありがたがるみたいに。クランツ
 はそんな骨董趣味の愛などにはひかれず、ジュネーブで宗教だと決めてる女性を愛している。
 素朴で、単純で、寡黙で、若く、服装などに無頓着だが、美人でもない。好色な輩の中には健
 全な売春婦ではなく、一生懸命働く田舎娘がよいといいはる者がいるごとく。グレイアスはま
 だこの英国にいて、悪徳客引きみたいな説教者や流行みたいにまだ新しい法律と一緒に住む女
 だけが申し分なしだと教えるし、名付け親はやさしい娘だよと提供するものだから、その女性
 を抱いている。まるで小役人が上役から与えられたり、金を払ってもらうように女房をもらっ
 ているようなものだ。無関心なフライジアスはどの女も良くないと言ってすべて嫌う。それで

は売春婦がいるからといって誰とも結婚しないようなものだ。グラッカスは、すべせの女を1人のものとして愛す。女というものは違った国で違ったくせがあるが、中味は同じなのだと思っている。だから愛しているし、それが宗教だと。

ミレアスは信仰をローマ・カトリックに捜し求める。ローマには確かに千年前にはあったのだからと言いながら。クランツはカルヴィンに代表されるプロテスタントの信仰を、グレイアスは英国国教会の信仰を求める。フライジアスはどれもこれも嫌って無宗教、グラッカスときたらどれもこれも皆同じ、それが宗教だと思っている。という風に Donne は当時の人々を少し皮肉を込めて描いてみせた。

Donne が諷刺詩を書いている頃、スペインではイエズス会士ホアン・デ・マリアナが『君主と君主制度』を出版(1598年)し、ローマ教皇に反抗する者は王であっても殺害しても良いという教義を明確に打ち出したのである。ローマ教皇公認の秘密暗殺団が組織されることとなり、英国やヨーロッパに送られた。英国では1603年エリザベス女王が死去し、スコットランド王ジェームズ6世が王位後継者となり、ジェームズ1世として即位した。

ジェームズ1世はカトリックであったメアリの息子であったのでカトリック教徒は喜んでジェームズ1世を迎えた。しかしジェームズ1世は国王絶対主義の英国国教会に賛成であったため、カトリック教徒に不満をいだかせる結果となった。

1605年未遂に終わったものの、ガイ・フォークスを主犯とする「火薬陰謀事件」(Gunpowder Plot)が発覚し、Donne にベラーミンのことを教えたと言われたイエズス会士ガーネット、オールドコーンも捕えられ絞首刑となっている。

当時ローマ教皇の主権を否定して、国王を英国国教会主権者として忠誠を誓わせる宣誓に関して、カトリックと英国国教会で激しい論争が行われていた。

Donne がその手伝いをしたモートンも論争者の1人であった。英国のカトリック教徒に対し「忠誠の誓い」(Oath of Allegiance)をしないようにパンフレット印刷物で論戦をはっていたのが、パースンズであった。

Donne は『説教集』(*The Sermons of John Donne*)の中で殉教者ステパノについて22回引用している。殉教ということに Donne が特別の意味を込めていたのではないかと思われる節がある。近い親類に殉教者と呼ばれた人がいたり、弟ヘンリーがカトリック司祭を匿ったことで投獄され、獄死したことなども大きく影響しているであろう。

枢機卿ベラーミンもパースンズと同様に論争神学の中で殉教の必要性を説き、その弟子たちが英国国教会と戦うことで実戦していたのである。

Donne は前述のモートンに依頼されてカトリックに対する論客として筆をとることになる。このこと自体は神学的知識のあった Donne にとってさほどむずかしいことではなかったであろう。しかし積極的であったかどうかははっきりしない。当時、Donne は無職の状態で財政的に苦しかったし、とにかく出世の糸口になるかもしれないと考えていた。Donne が実際に論争に

かかわることによって、聖職者への道を歩むことになっていったことは確かなことである。

そして自ら『ニセ殉教者』(*Pseudo Martyr*)を出版することによって Donne の歩むべき進が決められていくこととなったのである。そして次の年1611年『イグナティウスの秘密会議』(*Ignatius his Conclave*)を出版することとなる。

IV

『ニセ殉教者』は Donne の初期の作品の中で1番長いが、あまり面白くないと言われて来たものである。しかし、この作品は出版という形をとった最初のものであったことや Donne にとって大きな転機となったことで重要な作品である。そして前述した「論争神学」の流れの中でとらえ直すとき、新しい意味を持ってくる。

ウォルトンはジェームズ1世の命によってこの作品が書かれたと述べているが、H・ガードナーやT・ヒーリィそれにボールドが研究しているように序文からウォルトンの説は正しくない。出版後、ジェームズ1世からの称賛を受けたことは確かであり、Donne はこの本によってオックスフォード大学から名誉修士号を授けられた。そして論争神学者としても名声を高めたのである。

「火薬陰謀事件」(1605年)の発覚後、英国議会は全ての英国国教忌避者に「忠誠の誓い」(*Oath of Allegiance*)を強請しようとしていた。その誓いをするということはローマ教皇の権力が英国国王には及ばず、破門などは出来ないということを意味した。

しかしカトリックの「穏健派」の中には、その誓いを受けいれても良いとする動きもあって、絶対拒否を説く「過激派」イエズス会を批難していた現実もあった。そのような状況の中で『ニセ殉教者』は「誓い」に対して決定しかねていたカトリック国教忌避者たちを動揺させたと思われる。

For this Oath must worke upon us all; and as it must draw from the Papists a profession, so it must from us, a Confirmation for our Obedience; They must testifie an Alleageance by the Oath, we, an Alleageance to it. For, since in providing for your Majesties securitie, the Oath defends us, it is reason, that wee defend it. The strongest Castle that is, cannot defend the Inhabitants, if they sleepe, or neglect the defence of that, which defends them; No more can this Oath, thoug framed with all advantagious Christianly wisdom, secure your Májestie, and us in you, if by our adversaries Batteries, or to his underminings.

(この「誓い」は私たち全ての者に有効でなければなりません。カトリック教の教皇礼賛者からも誓約を引きださねばならないように、私たちからも国王に対する服従の確証を得ることを意味しています。私たちが忠誠をつくす「誓い」による忠誠を教皇礼賛者たちも宣誓しなければなりません。なぜなら国王陛下の保護のもと「誓い」が私たちを守ってくれるからこそ私たちはその誓いを守るのです。たとえそれが一番強固な「城」であっても、住人が眠っていたり、自

分たちを守ってくれる城そのものを守る気持がなければ、住人を守ることはできないわけです。この「誓い」はあらゆる有益なキリスト者の知恵で固められてはいるとしても、敵の砲列やその侵入に対して不注意に開けてしまうなら国王もあなたがたの中にいる私たちも保証のかぎりではないでしょう。)

巧みに「誓い」を強固な城になぞらえて、Donne はカトリック司祭や信者たちに向って「あなたがたにとっても英国に住むかぎりは大切なことなのだ」と言います。

そして国王と司祭の関係は共に協力し合って生きることこそ大切なのだという英国国教会の基本を述べます。

For as when the roofof the Temple rent asunder, not long after followed the ruine of the foundation it self: So if these Two principall beames and Toppe-rafters, *the Prince and the Priest*, rent asunder, the whole frame and Foundation of Christian Religion will be shaken. And if we distinguish not between Articles of faith & Jurisdiction, but account all those super-edifications and furnitures, and ornaments which God hath afforded to his Church, for exterior government, to be equally the Foundation it selfe, there can bee no Church; as there could be no body of a man, if it were all eye.

(というのは寺院の屋根がこわれると、すぐに基盤まで崩壊のうきめに会うように、この主要な梁(はり)と上部樑(たるき)である、国王と司祭がこわれたら、全てのキリスト教信仰の枠と基盤はがたがたになるでしょう。私たちが信仰に関する法と法的管轄権とを区別しないで、神がカトリック教会にお赦しになって来たあのキリスト教の伝統や家具や装飾すべてを考えるなら、目に見える政治がキリスト教の基盤そのものになってしまっただけで教会は無くなってしまいます。すべてが目になってしまうなら、人間の身体は無くなってしまふようになります。)

国王と司祭との関係を建築用語などを使ったあとで法律的にみても国王と司祭の役割も違ふのだと述べている。

And although I apprehended well enough, that this irresolution not onely retarded my fortune, but also bred some scandall, and endangered my spirituall reputation, by laying me open to many mis-interpretations; yet all these respects did not transport me to any violent and sudden determination, till I had, to the measure of my poore wit and judgement, survayed and digested the whole body of Divinity, controverted betweene ours and the Romane Church.

(この優柔不断が私の運命をくるわせただけでなく、誤解もあったのですが、悪いうわさも広がったりして私の信仰的評判さえもあやうくなったことを十分に承知していたのですけれども、なおよくよく考えても激しく性急な決断には到らせなかったのです。しかし私の貧しい知識と判断力を駆使して、やっとのことで英国国教会とローマ教会との間で論争されている神学体系を全て研究しつくして、私なりに消化することが出来たのです。)

Donne はこの箇所でなかなか決断がつかなかったという個人的な経験を述べ、英国の中で生きるかぎり英国国教会を支持することを明確にします。

To let blood in some diseases, saith the eloquentest Physitian, is no new thing; but that there shoujd scarce be any disease, in which we should not let blood, is (saith he) a strange and new fashion: So to offer our lives for defence of Cathalique faith, hath ever beene a religious custome; but to cal every pertence of the Pope, Catholique faith, and to bleede to death for it, is a rickenesse and a medicine, which the Primitive Church never understood.

(病気で血を流すことは、新しいことではない、と最も雄弁な医者と言った。しかし血を流さない病気などまず無いというのが奇妙で新しい流行なのである、とも言った。そこでカトリック信仰を守るために私たちの生命を提供することは、かつてはたしかに宗教的な習慣でありました。しかしローマ教皇やカトリック信仰にかこつけて呼びかけたりそのために血を流して死ぬことは、原始キリスト教会が決して理解できない1種の病気であり、治療が必要なものでありましょう。)

Donne がこの『ニセ殉教者』を書くにあたり気になっていた人物がいた。ロバート・パースンズである。前述のエドモンド・チャンピオンが1581年に惨酷な最後をとげてから、パースンズは身の危険を感じてフランスに渡った。パースンズは英国をカトリック教にするために神学校をスペイン、フランス、ドイツに設立した。エリザベス1世からジェームズ1世に変わってからもパンフレット等の出版を通して布教活動を行っていた。パースンズによって英国カトリック布教活動及び政策はイエズス会の下に置かれることとなった業績は大きい。

Donne が手伝いをしていたモートンとパースンズは論敵であった。Donne 自身もこの本の中でパースンズを偉大な司祭として認めつつ、それでもなぜ Donne 自身が英国国教会信者であるかを述べている箇所がある。しかし Donne がこの『ニセ殉教者』を出版した同年、パースンズは1610年4月15日ローマの英国神学校でこの本を読まずに死亡している。

I call to witness against you, those whose testimonie God himselfe hath accepted. Speake then and testifie, O you glorious and triumphant Army of Martyrs, who enjoy now a permanent triumph in heaven, which knew the voice of your Shepheard, and

staid till he cald, and went then with all alacritie: Is there any man received into your blessed Legion, by title of such a Death, as sedition, scandall, or any humane respect occasioned?

(あなたがたに反対の証言をするために私は呼びかける人々がいます。その人々の証言を神御自身が受け入れて下さっていたから。ああ、あなたがた恵まれ、勝利にあふれた殉教者軍団よ、あなたがたは今、天国で永遠の勝利を味わっています。あなたがた羊は羊飼であるイエスの声を知っていたし、羊飼が呼ぶまでそこにじっとして、呼ばれはじめて敏速に行動しました。人を惑わしたり、信仰をつまずかせたりするような「死」の資格であなたがたの祝福された軍団に受け入れられた人や尊敬にあたいする人がいるでしょうか。)

殉教などはそんなものではないのだということを Donne は説いている。もし身の安全を愛し、祖国の平和を愛するならば、目覚めよ。あなたがたがやろうとしていることは無駄なことなのだ、と。

But the greatest injury that is done to Princes in this matter of Exemption, is, that they will not be beholden to Princes for it: but plead their *Jus Divinum*, not onely the positive Divine Law, by which, they say, that the Popes if they had not found these men naturally exempted, and if Princes had not granted these exemptions, might by their Constitutions, have exempted them, without asking leave of Princes, but they pretend text of Scripture, though detorted and misus'd; to prove this Exemption. And for the Persons they pretend many; but with no more directnes, than that by which they prove exemption of their goods, from secular charges and burdens, which is, *Domini est terra, et plenitudo eius*, and since it is the Lords, it is theirs.

(しかしこの特赦の問題で国王達に対してした大きな無礼は教皇礼賛者たちが国王達の恩義を受けるところか、自分たちの教会法を持ち出したことである。それは、いわゆるすぐに特赦を受けられなかったり国王達はその特赦を受け入れなかった場合には、教皇自らが歴代の教会法にのっとり、国王の許可を得ずに特赦したかもしれないという実定教会法だけにととまらず、教皇礼賛者たちは曲解したり、濫用してでもこの特赦を正統化しようとして聖書を偽って引用したりしているのです。そしてパーソンズ派のためにたくさんの偽りを述べる。しかし卒直さがなく、この世の間責や苦しみからその資格の特赦を立正するときと同様である。主が全世界デアリ、ソレデ十全デアル、そしてそれは神のものであるから、王国のものでもある。)

カトリック司祭やイエズス会士それにその弟子たちに向って、法的にも王国の住む国にいる限り従わなければならないと説く。

All which they guarrell at in the oath, is that anything should be pronounced, or any limits set, to which the popes power night not extend: but they might as well say that his spirituall power were limited or shortned, and so the Catholique faith impugned, if one shauld denie him to have power over the winde and sea; since to tame and commaund these, *in ordine ad spiritualia*, would advance the conversion of the Indies, and impaire the Turks grzatsnesse, and have furthered his fatherly and spirituall care of this kingdome in 88.

(人々が誓いのことで文句だけ言うなら、何か罰を受けるか、何か制限を受けるべきです。そこまでは教皇の力ものびてこないでしょう。しかし教皇の霊的力が制限を受けたり短くなったりしたとか、もしもある人が教皇の力は風や海をしたがわせるほどでないと言ったなら、カトリック信仰が攻撃されていると人々はまた言うかもしれません。霊ニ メイズルノニ タイシテ 風や海をなだめたり、したがわせたりすることはインド諸島の人たちにキリスト教へ帰衣をすすめたり、イスラム教徒の偉大さを損こわわしめ、88のうちのこの王国を教父的にも霊的にも配慮し促進することとなったであろうから)

決して教皇の霊的な力を制限するつもりはなく、積極的に活動して英国国民を霊的にも成長させてほしいと述べている。

たしかに『ニセ殉教者』は「穏健派」を動揺させることには成功したであろうが、このような本の出版のためにイエズス会士たちは反対に反発を感じさらに「過激」になっていった。そのような意味でこの本の意図した一英国国教忌避者にすこしでも「忠誠の誓い」を誓わせることに成功したかどうかはうたがわしい。

いままでの神学論争の中に法律を持ち込んでいることなどは新しいところであること。イエズス会が殉教をすすめているが、それは犬死であり、殉教などとは呼べないということを説いた。

V

外交官か何かになりたいと思っていた Donne は皮肉なことに、自分が若い頃、諷刺していた論争神学者や聖者注解者そのものの道に進まざるを得ないところまで来ていた。

ジェームズ1世にとってもカトリックに対して博学な論争神学者 Donne を英国国教会陣営の中に迎えることが出来ることは喜ばしいことだったに違いない。王にとってはピューリタンに対する政策にも手をやいていたが、カトリックに対しては確かに手薄になっていると感じていた矢先のことであった。

Donne はこの『ニセ殉教者』出版後もすぐに聖職の道にはつかずに、様々に抵抗のあとがみられるが、出版して5年後の1615年ついに英国国教会聖職者の道に入ることとなった。

John Donne と「論争神学」

2. Gardner, H., *John Donne, The Elegies and The Songs and Sonnets*, Oxford, 1966
3. Gardner, H. & Healy, T., *John Donne, Selected Prose*, Oxford, 1967
4. Garrod, H. W., *John Donne with Izaak Walton's Life*, Oxford, 1960
5. Healy, T., *John Donne, Ignatius his Conclave*, Oxford, 1969
6. Milgate, W., *The Epithalamions Anniversaries and Epicedes of John Donne*, Oxford, 1978